- 18) Trigault; *Ibid*, Liv. II, Chpa. VII.
 Huc; *Christianity in China etc.* Vol. II, Chap. II.
 Jesus; *Historic Macao*, 1902. P. 45
- 19) Ljungstedt; *Ibid*, P. 121.
- 20) Jesus; *Ibid*, P. 46.
- 21) Archivo Portuguez Oriental. fase III. Part I.
- 22) Ljungstedt; *Ibid*, P. 22.
- 23) Jesus; *Ibid*, PR. 46, 47.
- 24) Morrison; *Companion to the Anglo-Chinese Calendar* 30) Riess; *Ibid*, S. 27.
- 25) for 1832, (Ljungstedt; *Ibid*, P. 22.)
 Samedo; *Ibid*, Part II, Chap. I.
- 26) Montgomery Martin; *China etc.*, Vol. II. P. 7.
- 27) Danvers; *The Portuguese in India*. Vol. II. P. 291.
- 28) Ljungstedt; *Ibid*, P. 85.
- 29) Navarrete; *An Account of the Empire of China* (China's Voyages and Travels. Vol. I) Book VI, Chap. XVII, P. 265.

都市としての鎌倉

文學士 川 上 多 助

一 緒 言

相模國鎌倉郡鎌倉郷の初めて歴史に知られるのは天平七年の相模國封戸租交易帳である。同帳に據れば當時鎌倉には從四位下高田王の食封が三十戸あつて、輸租、不輸租の田合計百三十五町百九歩の中、輸租田百五町二段の租一千五百七十八束

を折半して、一半は之を國衙に納め一半は之を高田王に納めて居つた。而して同交易帳に載する十二郷の中で、鎌倉は封戸の數最少く、其田積もまた少い方に屬するものであるから、縱令鎌倉が古來當國の名邑たるを信せしむる理由があるにしても、少くとも奈良時代に於ては地方的にも繁華な

どころでなかつた事を認めなければならぬ。然るにその鎌倉が五百年後に於て相模全國はおろか、京鎌倉と並び稱せられて日本の大都市となつたのは、頼朝が幕府を開いて其後永く鎌倉が政治の中心となつたからで、商工業の都市として發達したのではない。それ故鎌倉の全盛であつたのは幕府

或は關東管領の威力の行はれた二百五十餘年の間で、管領家が内訌に苦しみ始めた頃からして漸く衰微の兆を顯はし、康正元年六月今川範忠が海道五ヶ國の兵を率ゐて鎌倉へ討入り、管領屋敷を初めとして谷七郷の神社佛閣を焼拂つてからは、鎌倉は永久に政權と離れて遂に再興の機を得ることが出来なかつた。それより凡三十年を経て文明十八年の春、此地に遊んだ萬里和尙は列侯舊栖の地を遍歴して黍離章を歌ふ再三にして去ると云ひ、翌年北國から鎌倉へ廻り來つた堯惠法印の北國紀行にも亦同様な感想を述べて居る。併し、南北朝以

後の鎌倉の市勢發展の情況は適當なる史料を得られないから之を他日に期し、本篇に於ては専ら其の鎌倉時代に就いて述べざるを得ないのは遺憾である。

二 關府以前の鎌倉

鎌倉が盛になつてからは東は六浦、南は小壺、西は稻村、北は山内に至る地域を稱して鎌倉と云ひ、元仁元年十二月及び嘉禎元年十二月に行はれた四角四境祭も、大凡この境界によつたのであるけれども、幕府草創當時の鎌倉は決して斯の如く廣くはなかつた。養和元年九月に桐生六郎が其主藤原俊綱の首を持つて武藏大路に來た時に、頼朝は六郎の鎌倉に入るを許さず直に深澤を経て腰越に向はしめたといへば、西は現今の大佛附近にも及ばなかつたのである。又源平盛衰記卷二に「小次郎○和田義茂ハイサ、カ公用アリテ鎌倉ニ立寄タリケルカ、是ヲ聞驚駭ギテ馬ニ打乘リ、犬懸坂ヲ馳

越テ名越ニテ浦ヲ見レバ」云々とあれば、南は名越が已に鎌倉の内でなかつたやうである。されば東も丘陵を越えて六浦まで達する筈もなく、唯北の山内を境とすることだけが前後に通じて變らなかつた位のものである。要するに當時の鎌倉は鶴岡社前の平地に在つた一小村落に過ぎなかつたのである。されど武藏から山内を経て鎌倉に入る道路と箱根を越えて稻村から鎌倉に入る道路とは當時から既に開けて、新田大炊助入道上西が鎌倉に入らむとして頼朝に拒まれ山内に逗留した事は吾妻鏡治承四年十二月の條に見え、武藏大路の名は翌養和元年九月の條に見ゆる次に稻村の入口には、治承四年十月頼朝が鎌倉に入つて後五日目に政子が伊豆國を發つて鎌倉に來たけれども、日次が宜くないので稻瀬河邊に一夜を明したといふ吾妻鏡の記事や、源平盛衰記^{卷二}に和田義盛が三浦から石橋山へ馳參する道筋を叙して「鎌倉通ニ腰越

稻村八松原大磯小磯打過テ二日路ヲ一日ニ酒匂ノ宿ニ著」とあるので知られよう。これが爲めに三浦半島に據る三浦の一族に取つて鎌倉は重要な地點となつて、畠山重忠が河越重頼等と共に三浦氏を攻めし時に、三浦氏は先づ兵を出して由比濱を守り、其軍敗れて衣笠城に退き、城陥りて義明は討死し、義澄は安房に遁れて頼朝等と一緒になつたのである。

頼朝が千葉常胤の建議を採用して鎌倉を根據地とするに至りし理由は、鎌倉が源氏に取つて歴史の縁故の深い事と且つ其地勢が軍事上の要害に富んで居るといふのである。源氏と鎌倉との因縁を釋ぬれば遠く頼義、義家の時代まで溯ることも出来るが、頼朝の父なる義朝は其中央の政界に顯はるゝ以前は龜谷に居つて東國の經營に力を盡し、鎌倉を中心として近國の諸豪族と連絡を取つてゐたのである。先づ義朝の父爲義の乳母であつた山

内資通は山内から起つた豪族であらう、義朝の嫡男義平は鎌倉に居つたので鎌倉悪源大と稱し、平治物語に據れば三浦介は母方の祖父であると言ひ又同じく義朝の子である朝長の母は波多野義道の妹で、朝長の舊宅といふものが松田郷にあり、頼朝が後に修理を加へて之を松田御亭と稱した。この外單に主従の關係によつて義朝に隸屬した豪族も多いが例を擧ぐるにも及ぶまい。次に軍事上の要害といふのは三面丘陵を以て圍まれ一面海に接する鎌倉の地勢を指すのであるが、殊に陸上の戦が敗れた後には、海路身を以て房州に遁るゝ便宜が備はつてゐた事も考へねばならぬ。建保元年の和田の亂に朝夷三郎義秀が士卒を率ゐ六艘の船に分乘して鎌倉から安房へ遁れた例なども參考とする事が出來よう。頼朝が根據地を選定する時に果して斯の如き退嬰的の考を懷いて居つたか何うか疑はれぬでもないが、當時の形勢は源平勝敗の數

未だ明かならざりし上に、頼朝は石橋山の戦に躓いた後であるから幾重にも萬全の策を取らねばならぬ必要があつたのである。且つ安房國九御厨は頼義以來の源氏の領地であつたが、義朝になつて平治元年之を伊勢大宮に寄進したのである、吾妻鏡には頼朝の官位の昇進を祈る爲めに寄進したやうに書いてあるが、義朝は是より先き天養元年に相模國目代源頼清を助けて相州鶴沼の神領を犯し、神宮の禰宜から訴へられた事實のあるのだから、其信仰に就いても疑ふべき餘地の存する譯である。思ふに此寄進は義朝が其地の領有に重きを置きし爲め、當時の寄進讓與に通例である如く、之を大神宮に寄進して所有の確實を謀つたのではなからうか。若し果して然りとすれば頼朝が石橋山に敗れた後に安房へ遁れた事の偶然でないのを知ると共に、鎌倉が守を失した場合に頼朝が再び房州へ遁れようとする下心を懷いて居つた様に

見るのも無理ではなからうと思ふ。

三 人口に關する考察

治承四年頼朝が初めて鑱倉に入つた頃には、鑱倉中に名僧がないからといつて上總國から阿闍梨定兼を呼び迎へて鶴岡供僧職となし、鶴岡の若宮を造營する時にも鑱倉中には適當なる工匠のなかつた爲めに武藏國から態々之を招かねばならなかつた。然るに幕府の設立せらるゝと共に御家人の邸宅も建てられて漸く都市の體裁を備ふるに至り其後四十年餘りにして貞應二年京都から由井濱に著いた源光行をして「教百艘の舟とも綱をくさりて大津の浦に似たり、千萬宇の宅軒をならべて大淀のわたりに異らず」と稱せしむる程になつた。されど鑱倉の盛時果して幾何の戸口を有したか、之を、説明すべき史料に未だ接することを得ない。故吉田博士は建長四年幕府が鑱倉中に酒を賣る事を禁じ、民家に蓄へられた酒壺を調べさせたこと

ろが、三萬七千二百七十四に及んだといふ吾妻鏡の記事に據り、毎戸三四口を置くこと假定して約一萬戸はあつたらうと推測を下したが、其假定の根據を示さないから信する事は出来ない。併し鑱倉中に亘つて人家の稠密なりし事は疑もなく、建長三年二月十日甘繩邊に火事があつて成刻から子の一點に至つて猶熄まず其區域東は若宮大路、南は由比濱、北は中下馬橋、西は佐々目谷に及ぶといひ翌四年二月八日の火事には西は壽福寺の前、東は名越山王堂前南は和賀江、北は宮大路上に及び其内残る所なく焼亡したといひ、やゝ後れて應安三年記九月十三日の條に飯島の流失せる事を記して在家三百餘宇、富饒所云々とある、是等の事實によつて鑱倉の繁榮を想像するには充分であらうと信する。けれども其總戸數を舉げて云ふことは不可能である、隨て人口も甚だ多かつたには相違ないが其數を指して云ふことは出来ぬ。尤北條九代記

帝王編年記には永仁元年四月の大地震に鎌倉中の山崩れ家倒れて、死する者二萬三千二十四人に達したとあるが、其數字に誤なきや否や之を信ずるには少しく躊躇せざるを得ない。

鎌倉の住民の中心勢力を成したものは武士であつて、幕府創立の初め東國の武士は各其在所を離れ一族郎等を率ゐて鎌倉に在勤し或は幕府の政治に參與し或は警衛に備へて居つた。それ故武士が其在所へ歸るのは却て特別の理由のあつた場合で北條時政が頼朝に不平の事あつて北條に歸りしが如き、畠山重忠が伊勢の領地に置いた代官の罪に坐して謹慎を命ぜられ頼朝の怒解けて一時武藏菅谷に歸りたるが如き、又頼朝の薨後梶原景時が同僚の彈劾を受けて相模一宮に行きしが如きの類是れである。吾妻鏡建仁三年四月の條に伊豫の御家人河野通信が頼朝の時以來永年鎌倉に在つて奉公を勤めたので異數の優遇を受け暇を賜はつて歸國

したとあれば、武士の鎌倉へ出て幕府に勤仕するのは東國の御家人だけに限つた事でない事は明かである。北條氏執權の世となつては北條氏一族の間に政權が集注し、且つ兵を用ふる必要の減するに従て、其制度も緩かになり御家人の田舎住ひも多くなつたやうに見ゆるが兎に角猶繼續して行はれ殊に嘉祿元年十二月から鎌倉大番役の始まつて遠江以下十五ヶ國の御家人は十二ヶ月を一期として幕府の西侍に祇候する事となつた。新編禰寢氏世錄正統系圖仁治二年十一月十二日守護所沙彌某の下知狀に大隅國御家人建部清綱が京鎌倉參上の用途を禰寢院内の名主百姓に課するも先例に反き應せざる事を訴へ同書延慶二年十二月廿二日前上總介平朝臣の下知狀には同じく大隅の御家人曾木五郎太郎宗茂が寶治元年の三浦氏の亂に法華堂の前で戦功を抽じたる事を載せてあるが是等の例に據れば大隅の果に住む御家人でも或期間は鎌倉へ

出て幕府へ仕へねばならなかつた事が證せられる是等の御家人を當時鎌倉參仕の仁と稱して、弘安九年八月幕府は其の鎌倉に來てゐる間に悪黨が所領内に隠れ住み百日以上に及べば、縦令情を知らなくとも所領の三分の一を沒收することを定めた此時代の中國から九州の御家人の讓狀の中に往々鎌倉の屋敷地を列擧するのを見受くるも、所謂鎌倉參仕の義務を果す爲に之を所有する必要のあつたからであらう。其例を擧ぐれば山内首藤文書元徳二年三月十八日沙彌長快の讓狀に一所鎌倉甘繩地事と見え、小早川什書正嘉二年七月十九日沙彌某の讓狀に鎌倉米町在家一字跡宗次入道居住跡と見え、薩藩舊記入來院氏文書寛元三年五月十一日僧某の遺言狀に「かまくらのやちは三郎にとらす」と見え相良文書正應三年五月八日迎蓮相良頼俊の讓狀に鎌倉の釋迦堂の前地事とあるが如くである。

さて鎌倉に居つた武士の數は如何程であつたか

是れまた遺憾ながら知ることには出來ない。文治元年十月勝長壽院の供養を舉行した時に、群參の御家人重なるもの二千九十六人に上つたといふけれど、其供養が晴の盛典であつただけに特別に多數の御家人が鎌倉に聚まつたのであるから、之を以て平時の人數を定むるとは出來ぬ。又幕府より見て陪臣となるものは御家人とせぬ規定であるから在鎌倉の武士の總人數を知るには是等の御家人に從ふ武士僕徒の類も考へねばならぬ。それに就き吾妻鏡元暦元年十一月廿一日頼朝が筑後權守俊兼の服裝の華美なるを戒むる條に、千葉常胤、土肥實平を例に擧げて「各衣服以下用麩品不好美麗、故其家有富有之聞、令扶持數輩郎從欲勵勳功」といへるに據れば、常胤實平の如き錚々たる御家人でも僅に五六人の郎徒を有するに過ぎぬやうに見えるが事實とは受取られない。元久二年畠山重忠が北條時政の命によつて菅谷から鎌倉に出で來た

時に其従兵は百三十四騎であつた、之を其子の重保が鎌倉で率ゐて居つた兵數と併せれば百五十乃至二百の人數はあつたと思はれる。又重忠以上の勢力を有して居つた和田義盛が建保元年五月二日鎌倉の中に兵を擧げた時には、翌日參加した横山時兼の兵を合せて三千騎といふが、之と戦つて打勝つた北條氏側の兵をより多數と見て四千騎とすれば、此時何れにも屬さなかつた武士を加へて一萬計りの數を得られるが、その中には近國の武士で邊に馳せ參じた者もあるから、平時に於て在鎌倉の武士の數は一萬に達しなかつたであらう。

而して是等の人々が鎌倉に居る間の食料其他必要なる物資は多く其所領より供給を仰いで居るものゝ如く、紀伊七郎左衛門尉重經が丹後國の地頭職としての收入を鎌倉へ廻送せしめた事が新舊追加悪口狼籍條に見ゆる。それ故物價の制限令は衣食の必要品を主として發せらるゝを通例とするけ

れども、建長五年十月幕府が鎌倉へ出した制限令は炭、薪、萱木、藁、糠の五種に限つて直接の衣食の必要品に關係しなかつた。是れまた右の事情に依るので、鎌倉の商賣町でない事は此点からも窺はれる。

武士を以て鎌倉の中心階級を形造るものとすれば、之に文化的の色彩を添へしどころの京下の人々及び僧侶に就いて亦多少の觀察を加へねばなるまい。頼朝は居を鎌倉に定むると共に京都から才幹の士を招いて軍事以外の行政に與からしめ幕府の基礎を確立せしが、一面に於ては樂人工匠等をも呼下して祭禮佛事を營み堂宇を建立して徐に東國文運の開拓を謀つた。而して頼朝自身も必要以外に京都の人を好みしと見え、平廣常が嘗て頼朝の不興を買ひし事ありしが、當時上總に流されて居つた平時忠の子伯耆守時家を頼朝に薦めて其怒

を解いた例があり、文治三年二月北條時政の推薦によつて右近將監家景を召抱へた時には、頼朝の語として吾妻鏡に雖非指貴人、於京都之輩者、聊可耻思之旨、被仰含昵近之士と載てある。それ故頼朝の時に於て既に京都から鎌倉へ來た者も漸く多くなつたのであるが、頼朝の後頼家を経て實朝に至り夫人を京都から迎へたれば、夫人に隨つて京都から來た男女も多く、草紙合繪などの遊戯が幕府の内に行はれて著しく京都風を帶ぶるやうになつた。次いで藤原氏親王家が將軍となつたのであるから、將軍の繼立毎に京都から東下し來る者が愈多くなりて、將軍の鶴岡社參には公卿諸大夫が供奉の中に加はり、御家人と朝臣との間に行はるる結婚に依つて生ずる御家人所領の移動は幕府の當局者をして其對策に苦心せしめた。武士は是等東下の京都人を京下の輩といつて擯斥したけれども蹴鞠和歌音樂等の遊藝より醫陰儒學の諸道

、さては各種の工藝に至るまで兎に角鎌倉に行はるゝやうになつたのは何れも皆彼等の功に歸せねばならぬ。されどまた幕府の最警戒したところの奢侈の風も彼等によつて刺戟され、京都に行つて居る東國の武士が其風に慣れて歸つて來るのと相待つて一層之を盛ならしめた。幕府方の儉約令としては早い方である仁治二年十二月の儉約令は、營中の外に於て酒宴の席に風流の菓子を用ひ或は衝重に畫圖を加へるを禁じたのであるが、之を諸家に觸れ仰せらるといへば、其の所謂京下の輩を戒めたるを知るであらう。又建長五年九月關東御家人及び鎌倉居住の人々の過差を停止せし際にも、特に法家の女房が五衣練貫等を用ふるを禁ずる事を書添へてあるを見れば、奢侈の源泉が那邊にあるか推測するに難くない。

鎌倉には寺院の數多く、就中建長圓覺の二寺の如きは禪宗修行の僧侶が諸國から集まつた所であ

る空華日工集に據れば建長圓覺共に一千近くの人
數を有つて居つたといふけれど、圓覺寺だけに就
いていへば正安三年七月に成りし同寺の鐘の銘に
本寺僧衆二百三十員となり、圓覺寺文書の弘安六
年寺用米注進狀に據るも各種の人員を總計して二
百五十名餘りであるから、日工集の記事は如何に

見ても誇張に過ぐるの嫌がある。猶同注進狀によ
れば圓覺寺一年の經濟は米千三百七十四石餘錢千
五百六貫餘を以て處理されて居つた。圓覺建長を
はじめ鎌倉の内外にある諸宗の寺院は、幕府及び
上下の信仰を繋ぎ其保護によつて隆盛を致したけ
れども、前代の寺院の如く之に乗じて寺領を擴張
する事もなく、又寺院の結構其物が、美を競ふ風
の少ければ、工藝發達の機會を生むことも少なか
つた。されど之を信する者は熱心の餘り家産を傾
けて追善供養を營む事のあつたから、弘長元年二
月幕府は之を戒め分限以上の法事を禁じた。又さ

ういふ幕府からして執權はじめ禪宗に歸依し高僧
智識を招いて饗應し、其食膳も政連諫草に據れば
調菜羹於□備之味、多加藥種於唐樣之膳といふの
であるから一通りのものではなかつたのであらう
と思ふ。

四 市制に關する考察

幕府草創の際主として鎌倉の市政に任じたるも
のは筑後權守俊兼で所謂京下の輩の一人であつた
文治三年三月梶原景時が讒訴の咎によつて鎌倉中
の道路を作りし時、同年八月雜色をして鎌倉及び
附近の海濱河溝を巡廻せし時、建久三年三月後白
河法皇追福の爲め山内に風呂を立て百ヶ日の間往
來の諸人及び土地の者を浴せしめた時に、奉行の
任に當つたものは俊兼である。俊兼は建久二年正
月の政所吉書始に中原親能等と共に公事奉行人に
補せられた幕府の重職であるから、幕府が鎌倉の
市政には可なり重きを置いて居つた事を認むるこ

どが出来よう。其精神は後までも續いて幕府が評定衆を設くるや鎌倉の市政は其中の一人が之に與るの例となつた、例へば寛元三年四月道路の法を定め夜討殺害人の變に備ふる爲め市民に續松を奉行せしめた奉行の後藤基綱、清原満定、寶治二年四月鎌倉中の商人の式敷を定めた奉行の中原倫重の如き、皆評定衆に列せる人である。隨て其權力も重く市政を管掌するといへ、單に一般庶民を支配するのみならず、御家人僧侶に對しても其職權を行ひ得たるが如く、弘長元年二月幕府が神社の振興を謀り神社佛寺の修造、神事法會の勤行を令し、幕府に祇候する者の家屋を美にし出仕の行装等に贅澤するを禁じたる事ありしが、其奉行たりし者は後藤登岐前司基政、小野澤左近大夫入道光蓮にして、此二人は其前後に通じて市政を擔任して居つた者である。此點に於て後の町奉行が全く寺社及び庶民以上の階級に關係しなかつたとは

大に趣を異にする。

斯の如く幕府の重職が市政を管理しては居つたけれども一定の職名のあるではなく便宜上之を行ふに過ぎなかつた。されど幕府の中葉以來政治機關の漸く複雑となり體裁の完備し市勢の發展するに従つて、幕府は鎌倉の市政を視るべき專任の職を置かねばならなくなつたので、初めて保檢斷奉行、地奉行の兩職を置くことゝなつた。兩職とも創設の年月を明かにするを得ないが、保檢斷奉行は吾妻鏡寶治二年四月七日の條、地奉行は同書建長二年四月廿日の條に見ゆるが初めてであらうと思ふ。保檢斷奉行は市中を巡察して非違を檢するの職であるが、寶治二年四月盜賊が幕府に入つて御厨子以下の重寶を竊取せし時に、保檢斷奉行が職務怠慢の罪を問はれた事があれば、其責任は當に市内に止まらず幕府の營中にも及んだのである。地奉行は道路屋舎賣買等の事を管理し、文永元年

四月東國の沽酒を禁じ、翌二年三月鎌倉中に散在せる町屋を停止して九ヶ所を許し、軒先の道路を掘上げて屋舎を禁じたるが如き、地奉行が幕府の命を奉じて行ふ所であつた。又建長二年四月保檢斷奉行、地奉行に命じて凡下の者の太刀を佩き、諸人の夜行するに弓箭を携ふるを禁せしめたるは、檢斷道路の兩方面に亘るからであらう。

平安京の條坊の制廢れてより新に一種の保制作り、便宜町を併せて一保となし毎保に刀禰を置いて其区域内の雜務を行はしめた。此種の保制は鎌倉にも行はれて、其雜務を掌るものを保々奉行人と稱した。吾妻鏡仁治元年十一月廿一日の條に今日爲鎌倉中警圍、辻々可燒箒之由被走、省充保内在家等、定結番可勤仕之旨、被觸仰保々奉行人等云々とあり、同二月二日の條に鎌倉中可被停止條々事、今日有沙汰治定、相分保々被付奉行人、固

可令禁遏之由云々とあるは其例である。幕府の命を保々の奉行人に傳ふるには執權先づ命を市政擔任の重職に下して之を奉行せしめ、命を受けしものは更に御教書を寫して各奉行人に分配して遵行せしむる順序を採るのである。保々奉行人は一に保司奉行人ともいひ、寛元三年四月廿二日幕府が五ヶ條の禁制を保々奉行人に命ずるに當り、同日執權武藏守の名によつて之を佐渡前司基綱に傳へた。基綱は此時評定衆であつたけれども鎌倉の市政を管理して居たのである。基綱は御教書を執權から受取ると之を寫して五日を経たる二十七日初めて之を各奉行人に通達した。

武家名目抄の保檢斷奉行、地奉行の按に「常の辭に保々の奉行人などいひしは即ち此兩奉行の事をつかねよべるなり」とあるによつて、保々奉行人と保檢斷奉行、地奉行とを同一に視るものがあるけれど、自分の調べた所でも又同書の列擧する

材料に就いて見ても其事實を證明するものは全く見當らない。前に引いた吾妻鏡仁治元年二月二日の條の相分保々被付奉行人といふ文は、明に保々に奉行人のありし事を示すものではなからうか。又吾妻鏡文永二年三月五日の條に見ゆる地奉行人小野澤左近大夫入道名目抄には政所の寄人としれども其據る所を知らずは是より先き屢々引付衆前壹岐守後藤基政と共に市政執行の任に當つて居つた者であるから、其地位は左程卑い者とは思はれぬ。然るに夫の寛元三年四月幕府が五ヶ條の禁制を保々奉行人へ傳へむとした時の手續の煩雜なりしを顧みれば、保々奉行人の幕府に對する地位の重くないのは明かである。保々奉行人は御教書を執權から直接に授けられないで評定衆基綱基政の父から其寫を受けたのではないか。地奉行或は保檢斷奉行と保々奉行人とを混同するは到底非なりと云はざるを得ない。

建長六年四月鎌倉中の雜人及び非御家人が奉行人の指揮に従はない事のあるを戒むる令の出てるが、之に因つて見れば奉行人の直接支配を受けないものは御家人だけで、武士でも非御家人は其命に服さねばならなかつたのである。幕府が是等の保々奉行人を指揮して鎌倉中に如何なる政治を行つたか、前述する所と重複する所もあるが一應之を調べて見よう。

(一)警備に就いて云へば、仁治元年二月鎌倉中保々奉行の存知すべき條々として盜人旅人辻捕惡黨を警め、同十一月各保在家の義務として辻々に箒を焼かしめ、寛元三年四月夜行を禁止、同六月住民をして常に續松を用意せしめ、若し夜討殺害人等のあれば聲に應じて各續松を持つて馳集まることを令した。

(二)道路の保全及び取締に就いて云へば、仁治元年二月町々辻々に於て賣買相撲を行ひ或は盲法

師の往來を妨ぐるを禁じた。是れと同時に小路を狭くする事を禁じたりしが、寛元三年五月また町屋を造つて次第に路を狭め或は家の檐を道路に差出し或は小家を溝の上に造り懸けるを禁じ、次いで建長四年二月文永二年三月略同様の禁令があつた。

(三)僧侶の取締も一部は保々奉行人の任務で、延應元年四月念佛者が魚鳥を食ひ女人を招寄せ或は黨を結び酒宴を恣にするを以て、奉行人をして其家を毀ち其身を鎌倉から追放せしめた。其時僧徒の裏頭姿で市中を横行するを禁じたが、弘長元年二月また之を各保に通じて禁せしめた。

(四)寶治元年六月三浦氏の隱謀が世間に傳はつて、近國の士卒が各其主人の許へ馳集つた時に、幕府は保々奉行人をして之を其住地に還さしめ、亂平ぎし後同年九月各保に命じて浪人を追放せしめた。鎌倉の繁昌するに従ひて田舎から出て來る

ものが多くなり、沙石集第七嫉妬の心には東國の者が京都などから女を連れて來て、後之を鎌倉へ賣飛ばすを鎌倉へ送るといつてゐた。それ故男女に拘らず鎌倉へ流れ込んで何うにもならなかつた者の多かつた事は想像に餘ある譯である。建長二年三月保々奉行人に命じて此類の者を書出させ田舎へ追還させたのは、斯かる事情のあつたからである。

(五)幕府は賣買に就いて放任主義を採らず其時の必要に應じて沽酒を禁じ或は最高價格を制限して物價の高騰を防ぎ、或は加賀江津の材木が寸法の區々であるが爲めに用に堪へないからと云つて之を一定し、又市場の秩序を紊す押買をば屢令を出して戒めて居つた。而して直接是等の取締に任ずる者は矢張り保々奉行人であつた。其頃質營業者が贓品を取つて錢を貸し、盜まれた本主が其贓品を發見して質入人の姓名住地を尋ねても實を告

げざる弊風が行はれたので、幕府は建長七年八月
質入の方法を嚴重にし、奉行人をして之を各保内
に知らしめ其弊害を除かうとした。新編
追加

幕府は商人に對し建保三年七月其員數を定め、
寶治二年四月其式數を定めしが、共に取締の便宜
から出た事であらう。されど鎌倉の繁榮は日毎に
増して行く商人の數或は種類を人爲的に制限せん
とするも到底行はれ難いので、幕府は更に營業區
域を一定せんとする方針を採りしと見ゆ、建長三
年十二月鎌倉に於ては大町、小町、米町、龜谷辻
和賀江、大倉辻、勢乘和飛坂山上以外の地に店を開
くを禁じた。されど後幾何もなくして右區域以外
に町家の散在するに至りしを以て、文永二年三月
改めて大町、小町、魚町、穀町、武藏大路下、須
地賀江橋、大倉辻の七ヶ所を以て町御免の所と定
めた。斯の如く幕府が商人の數や住所を一定して

取締の途を講じやうとする精神は、鎌倉に於いて
座の組織を促す原因となりはしないか、未だ座の
起源に就いて定説を得ない今日、輕々しく論斷す
ることは避けねばならぬが、少くとも座の組織は
幕府の商人取締の方針とは一致するやうである。
北條九代記に弘安三年十一月鎌倉に火事ありし事
を述べて、柳厨子より博勞座に至るとあるが、若
し此の博勞座が所謂座と同じ性質のものであるな
らば、可なり早くから鎌倉にも座のあつた譯であ
る。又商家のみを他の住民と區別して一區域に住
はしめた事は、江戸時代の城下町にある如く武家
町と商人町とを區別したやうに見ゆるが、江戸時
代には其區別が截然明かであるけれども、鎌倉に
於てはそれ程嚴重でなかつたらしい。米町は建長
三年以來町御免の所となり文永二年にも同じく御
免の所となつたけれど、其後に至りても北條政村
の屋敷は米町にあつた、同年七月に宗尊親王がそ

れへ參られた。又前にも引いた小早川什書の正嘉二年七月建長三年よりは七年目の沙彌某の讓狀には鎌倉米町在家一宇跡が載つて居る。即ち米町が町御免となつた後にも其中には武家の屋敷地が入交つて居つたのである。

鎌倉は幕府の直接監視の下にあるから、法制上に自ら諸國の人民と取扱を異にさるゝことがある。諸國の人民が守護の監視を受くる事も、鎌倉の住民は地奉行或は保々奉行人によつて行はれた。文永元年四月東國の沽酒を禁ずるに當り、地方は守護をして之を監視せしめしが、鎌倉にあつては地奉行の支配に任せ、新編追加守護行事條其頃都鄙を通じて行はれた勾引人人賣の處分に就いても、地方では之を守護地頭の裁量に任せなければ、鎌倉に於ては或は奉行人をして其交名を届出させて追放し、或は火印を其面に捺する事を規定したるが

如き其例である。新編追加火勾引條殊に鎌倉の中に土地を有する者には特別の地位を與へしと見ね、建長二年四月濫訴を禁ずる爲めに雜人の訴訟法を定め、地方には在所の地頭の舉狀を帶せしめしが、鎌倉の中では特に地主の推舉によつて提起するを許し弘安七年八月問注所の議により、鎌倉に居住する者が負物の利錢を滞りし時に之を督促するには、地主に懸けず直接に下部を以て催促する事に決した。新編追加賃物出賃條又之を租税制度の上より見るに、鎌倉時代に於て鎌倉の住民の爲めに特別に課せられた租税の有無を決すべき史料を得る能はざれども圓覺寺文書歷應二年十二月九日散位某の執達狀に據れば、飯島に關所があつて鎌倉に廻送する物資に就いて若干の關料を徴收して居つたやうに見ねる。此關税の如きは鎌倉幕府の末葉に於て既に發達して此時に及んだのであらうと思ふ。南北朝以後になつては鎌倉の住民に對して種々なる租税が

課せられて、永和二年八月圓覺寺造營の必要生じ其經費に就いて協議のありし時、空華の意見として今時化縁最難、又官家命國名大名助縁、亦恐難成、若夫官家創法、限三年以十州管内關稅棟別及鎌倉中諸課役等充之、暫停它寺社土木事、則雖不十成、其功略畢と云つた事が、其日用集に出てゐる。是れ課稅の餘儀なき理由を語るもので、其意見が採用せられたと見ね、同年十二月圓覺寺造營の要脚として明後年より三年間鎌倉中間別錢一文宛課する旨の文書が圓覺寺文書の中にある。併し此種類の租稅は此時始まつたのでなく、十年以前の貞治六年圓覺寺黃梅院華嚴塔修造の爲めに鎌倉六浦に小間別錢を課した事が相州文書に見えて居る。其後に於ては永徳二年及び應永廿一年の兩度に於て、圓覺寺の爲めに酒壺役錢を鎌倉中に課して修造の料に充てた。金澤の稱名寺も造營の經費を得る爲めに應永廿九年六浦庄内常福寺門前に勸

進關を設けて人別二文駄別三文宛の關稅を收めた武州。文書。建長寺其他の重なる社寺に於ても、修復或は造營の必要ある毎に、亦斯の如くして負擔を課するとしたならば、之に依つて鎌倉の住民が被る惑迷の程は知るべきである。又こゝに擧げた例だけでは鎌倉中の課稅はたゞ寺社の必要を充すを目的とするのみに見ゆるけれども、是れ偶、當時の文書を傳ふるものが寺社の外にない事情に依るので、關東管領家の收入を目的として課稅する事もあつたに相違ない。それ故寺院の收入となつた租稅の中にも從來關東管領家の收めつゝあつたのを或期間寄附して其寺院の收入としたものもあつて左に擧ぐる稱名寺所藏の文書の如きは其一例である。

六浦大道關所事、自明年二月三ヶ年間所寄附也、若背以前
事書之旨者可被却關所之狀如件

永享四年十二月廿三日

稱名寺長老

（持氏花押）